

第2章 高安千塚古墳群を取り巻く環境

第1節 歴史的環境

(1) 高安山麓の歴史

高安千塚古墳群が立地する高安山麓の歴史的な経過について理解するため、高安千塚古墳群が所在する周辺の歴史も含めて時代ごとに概観する。

①旧石器・縄文時代～弥生時代

当地域で最も古い人々の足跡は、今から2万年前、旧石器時代後期にさかのぼる。羽曳野丘陵の先端付近にあたる八尾南遺跡で国府型ナイフ形石器をはじめとする石器の製作跡が発掘調査で確認されている。

縄文時代の中河内（現在の八尾市、東大阪市、及び柏原市の範囲）は、河内湾と呼ばれる海が、現在の河内平野の奥深くまで入り込んでいた。そのため、高安山麓の山麓部を中心に恩智遺跡などで縄文時代の集落が確認されている。

弥生時代に入ると、海面が後退して、淡水化が進み、河内湖が中河内の北西側を中心に広がり、これに注ぐ旧大和川流域の肥沃な平野に多くの集落が営まれた。山麓部では、恩智遺跡や水越遺跡等の集落が拡大した。近年、花岡山遺跡では弥生時代後期の高地性集落が確認されている。また、大竹西遺跡では、近畿地方最古となる弥生時代後期の鋳造鉄剣が出土しており、有力者層の存在した集落があったことがわかる。

②古墳時代

古墳時代前期～中期

3世紀前半、古墳時代前期に平野部の久宝寺遺跡や東郷遺跡、中田遺跡など多くの大規模な集落が営まれた。これら集落と吉備や山陰をはじめとする他地域との頻繁な交流が認められる。山麓部では、瑠璃製の鍬形石製品が出土した大竹西遺跡や、玉造りが行われていた池島・福万寺遺跡などの集落が営まれた。

4世紀代に入ると、平野部で、



図2-1 心合寺山古墳と高安山麓（北東から）

美園古墳や萱振 1 号墳など精巧な形象埴輪を持つ方墳が見られるようになる。山麓部の北方では、楽音寺・大竹古墳群で造墓が始まり、前方後円墳と考えられる向山古墳や全長 70m 前後の前方後円墳の西ノ山古墳、全長 100m 前後の前方後円墳の花岡山古墳が造られた。いずれも山麓部北部周辺を拠点とした地域首長の墓と考えられる。

古墳時代中期になると、古市古墳群や百舌鳥古墳群に代表される巨大な前方後円墳が多く造られるなか、5 世紀前半に中河内最大の全長 160m の前方後円墳の心合寺山古墳が造られた。心合寺山古墳は、前代の前方後円墳とは隔絶した規模を有しており、中河内の山麓部から平野部を治めた首長の墓であったと考えられる。

古墳時代後期

6 世紀前半、山麓部の南方に全長 60m 前後の前方後円墳である郡川東塚古墳と郡川西塚古墳が出現した。朝鮮半島から畿内に導入された初期横穴式石室を埋葬主体としており、前方後円墳への横穴式石室の採用時期を考える上でも重要な古墳である。

郡川東塚古墳と郡川西塚古墳は、高安千塚古墳群の造墓契機となった古墳と考えられ、この造墓の前後に、高安千塚古墳群の郡川南支群で天井がドーム状をなす初期の横穴式石室を有する郡川 16 号墳を始まりとして造墓が開始された。その後、6 世紀後半には古墳数が増大し、高安千塚古墳群は最盛期を迎えた。

高安千塚古墳群の眼下に広がる河内平野は、河内湖沿岸に古くから朝鮮半島や大陸からの玄関口であった。古墳時代中期以降、鍛冶や馬飼いのなどの新進の技術や文化をもつ渡来系集団が居住しており、河内平野の開発を担っていた。高安千塚古墳群にはこのような中河内を拠点とする渡来系集団により造墓が開始されたと考えられる。また、かつて楽音寺・大竹古墳群が営まれた山麓部北方には、大型横穴式石室を有する愛宕塚古墳が造られていた。

畿内では、6 世紀末を過ぎ 7 世紀に入ると、3 世紀半ばから続いた前方後円墳を中心とする造墓が終焉を迎えた。薄葬令の影響もあり、その後は古墳の規模や数も縮小された。中央集権体制が整えられていくなかで、ヤマト政権から特別な位置づけを与えられた氏族や人物のみが、造墓を許されたのではないかと考えられる。高安千塚古墳群においても、急速に古墳の数が減り、造墓が終焉を迎える。一方で、同じ生駒山系西麓の大型群集墳である平尾山古墳群（柏原市）では、7 世紀後半にいたっても継続して造墓が行われている。高安千塚古墳群の造墓の終焉については、当時中河内を拠点としヤマト政権に参画していた有力氏族の物部氏の動向と連動していたものと考えられる。

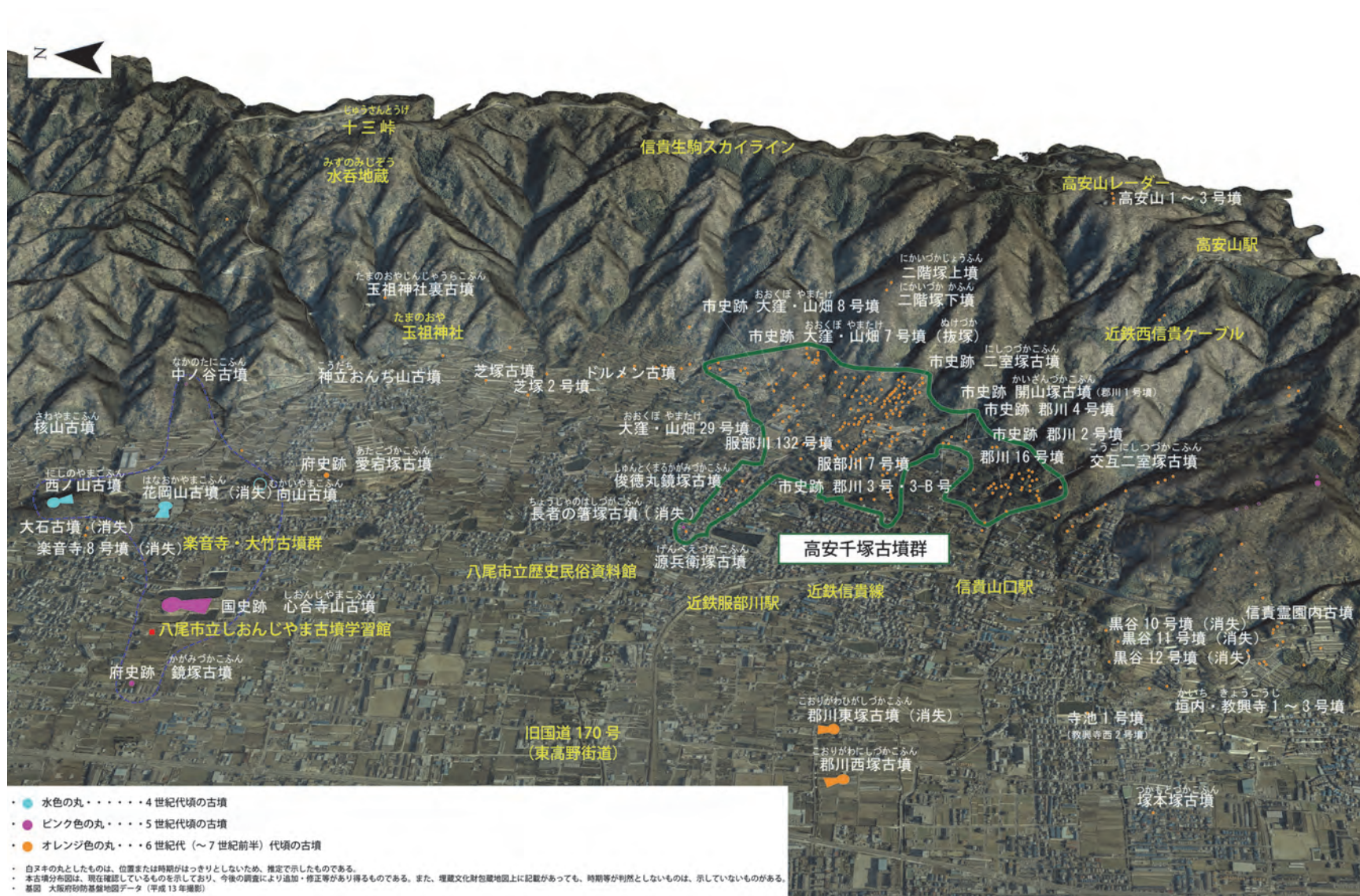


図 2-2 高安千塚古墳群と周辺の古墳の分布

③飛鳥時代

7世紀代にはいると、高安千塚古墳群で新たな古墳が造られなくなるが、横穴式石室を使った^{ついで}追葬や^{ついで}追祭祀は7世紀から8世紀にかけて続いた。7世紀代に営まれたことがわかっているのは、大窪・山畑支群で^{とうかん}陶棺に葬られた^{てんじんやま}天神山古墳、郡川支群の郡川3-B号墳等がある。このことから、高安千塚古墳群を営んだ氏族は衰退したものの、断絶したわけではないと考えられる。

一方で、河内には、^{ちしきでら}智識寺（柏原市）をはじめとする河内六寺（^{やましたでら}智識寺以下、^{おおさとでら}山下寺、^{みやけでら}大里寺、^{いえはらでら}三宅寺、^{ときかでら}家原寺、^{とさかでら}鳥坂寺）などの古代寺院が生駒山系の山麓部に造られた。河内六寺に続くように、同じく市域では^{しんごうじ}心合寺（秦興寺）や^{こまでら}高麗寺、^{きょうこうじ}教興寺をはじめとする寺院が建立された。平野部においては、7世紀前半、市内最古の寺（^{しづかわはいじ}渋川廃寺）が建立されている。物部氏と蘇我氏との争い（^{ていび}丁未の変）を経て、物部氏衰退後に、^{じょうぐう}上宮王家もしくは蘇我氏が建立したと考えられている。

645年の^{いっし}乙巳の変ののち、^{はんでんしゅうじゆのほう}班田収授法が定められるが、その基礎となる土地区画の制度が条里制であった。池島・福万寺遺跡では、飛鳥時代から奈良時代にかけての条里制の地割を示す水田跡が確認されている。

『日本書紀』によると、667年（^{てんち}天智6年）に^{たかやすのき}高安城が高安山頂付近に築造されたとある。高安城は、唐・新羅軍と戦い、百済が滅亡する^{はくすきのえ}白村江の戦い後の緊迫した対外状況の中、大和を防衛する最終の砦として築かれた。城の位置は明らかでなかったが、市民研究団体「高安城を探る会」により、高安山山頂付近の東側で奈良時代初めの倉庫跡が確認され、その一端を知る貴重な資料となった。高安城付近に終末期古墳である高安山古墳群が造られており、高安城に関連した被葬者が推定されている。

④奈良時代

710年（^{わどう}和銅3年）、藤原京から平城京に遷都され、律令国家としてのあゆみが始まった。八尾市は河内国に属し、その範囲は高安郡、若江郡、^{たじひ}渋川郡、志紀郡、丹比郡、^{おおがた}大県郡にまたがった。そして、平城京と難波宮、難波津を結ぶ要衝の地として発展した。市内の発掘調査では、^{じょうほうじ}成法寺遺跡や^{こざかい}小阪合遺跡などで奈良時代の建物や道路の跡の他、河川や井戸から祭祀に使われた^{ぼくしよじんめん}墨書人面土器や^{けい}銭貨が確認されている。

さらに『続日本紀』によると、奈良時代後期には、^{しやうとく}称徳天皇が^{ゆげ}弓削氏出身の道鏡の故郷である東弓削に行幸し、^{らいぶつ}弓削寺に礼仏した。769年（^{じんごけいうん}神護景雲3年）には、^{ゆげのみや}由義宮を平城京の西側に位置する^{にしきやう}西京として拡張、整備が進められた。しかし、天皇の死によりわずか1年足らずで造営は中止となった。由義宮や西京の実態は不明だったが、近年の東弓削遺跡の発掘調査で、^{ゆげでら}由義寺を推測できる東大寺式や興福寺式の瓦や基壇の切石片とともに^{たいきやう}塔基壇跡が発見されるなど、由義寺そして由義宮、さらに西京の実態を知る貴重な手がかりが得られている。

⑤平安時代

平城京から長岡京、さらに平安京への遷都により、摂津識^{せつしき}が廃止されるなど、平安時代になると摂津国とともに河内国の機能が低下していく。

平安時代後期には、貴族や大寺院が経営した荘園が各地に設置されるようになった。

山麓部には、藤原摂関家の荘園の一つであった玉櫛^{たまぐし}庄^{しょう}に関わる水田跡がみつかった池島・福万寺遺跡や、宇治平等院の瓦を焼いた向山瓦窯^{むかいやまがよう}がある。近年の平等院の瓦葺き替えに伴う調査で 1,500 枚を超える平安時代の瓦が現代まで葺かれていたことがわかり、そのうち 1,273 枚が河内系の瓦であったことが明らかになっている。摂関家の寺院経営において玉櫛庄の果たした役割が大きかったことを示すものとなっている。

平安時代初期に完成した『新撰姓氏録^{しんせんしやうじろく}』などの史料から、高安郡には、八戸史^{やべのふひと}や常澄宿禰^{つねずみのすくね}などの渡来系氏族と、鳥取連^{とりむらじ}や玉祖宿禰^{たまおやのすくね}などの在地系氏族の居住が知られるが、渡来系氏族が圧倒的に多いことが指摘されている。文献史学と考古学の成果を直接結び付けることは難しいが、多くの渡来系氏族が高安郡を拠点として活躍した証左となるだろう。

⑥鎌倉時代～室町時代

平安時代に引き続き、市域においても貴族や大寺院の荘園が多く営まれた。そして、新たに台頭した武士が開発した領地を寄進して、荘園を管理し、実権をもつようになった。武士化した地域の有力層の屋敷跡と推定される遺構が池島・福万寺遺跡で確認されている。

山麓部の式内社である玉祖神社には、1185 年（文治元年^{ぶんじ}）に、北条時政が神社の神宮寺である菫光寺^{おんこう}に与えた国内最古の木造制札^{もくぞうせいさつ}（禁制）が残されている。また、近年の発掘調査で菫光寺に関する 13 世紀から 14 世紀の遺構や遺物が確認されている。

また、心合寺山古墳の周濠を利用したため池の造成土内において鎌倉時代の土器が確認されており、鎌倉時代以降、山麓部の開発が進んだことがわかる。

山麓部の教興寺は飛鳥時代の創建とされるが、以降衰退していた。鎌倉時代になると、律宗の僧で西大寺中興の祖である叡尊^{えいそん}により復興が進められた。元寇による蒙古襲来の戦い、弘安の役では、朝廷が全国各地の諸寺に異国降伏の祈祷を命じているが、教興寺においては叡尊が祈祷を行っていた。

その後、室町時代から戦国時代にかけては、中河内も戦乱に巻き込まれ、山麓部では松の馬場や教興寺などが合戦の場となった。

⑦戦国時代～安土・桃山時代

平野部では、浄土真宗（開祖・親鸞）の中興の祖である蓮如^{れんにょ}の布教により、西証寺^{さいしやう}（のちの顕証寺^{けんしやう}）を中心とした久宝寺寺内町、さらに萱振寺内町が造られる。その後、江戸時代になると、久宝寺寺内町内部の分裂に伴い八尾寺内町が発展した。寺内町は、

城ではないものの、堀と土居で囲まれた強固な都市であった。また、戦国期の城は、高安山の山頂に信貴山城の出城があったほか、平野部には八尾城があり、当該期の遺構や遺物が確認されつつある。

織田信長の全国統一を引き継ぎ、戦国時代を終焉させた豊臣秀吉が、1583年（天正^{てんしょう}11年）、大坂城築城にあたって、山麓部の「千塚之石」を利用したとの記録（稲本文書ほか）が残っている。この「千塚」での石材採取は、山麓部北部を通る十三^{じゅうさん}街道に近い、高安千塚古墳群北側に位置する高安古墳群の石室石材を利用したものと考えられる。この地域では石室が削平された古墳も確認されている。そして、豊臣方と徳川方の最後の争いとなった1615年（慶長^{けicho}20年）の大坂夏の陣では、山麓部に徳川方が陣を敷き、その後平野部の萱振や久宝寺などが戦場になった。



公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 提供

図 2-3 発掘調査で見つかった豊臣期の大坂城の石垣

⑧江戸時代

河内平野は、河川が運ぶ肥沃な土砂で古くから田畑が開かれてきたが、その反面、洪水による被害も多発していた。洪水を防ぐ対策として、1704年（宝永^{ほうえい}元年）に中甚兵衛^{なかじんべえ}らにより大和川の付け替えが行われることになった。付け替え後、旧大和川の川筋の地では、新田開発が行われ、砂地に適した河内木綿が栽培され、全国的に著名な産地となった。山麓部の高安郡では「山根木綿^{やまねき}」と呼ばれ、河内を代表する木綿の産地のひとつとなっている。

江戸時代の高安千塚古墳群は、高安郡の大窪村や山畑村、服部川村、郡川村が範囲

にあたり、この地域の支配は淀藩（山城国）や小田原藩（相模国）が行った。古文書（斎藤家文書）によると、土砂災害を防ぐために置かれた「土砂留奉行^{どしやどめぎょう}」に対して、山畑村にある塚穴の石を取り出したい旨の申し立てがあるなど、江戸時代における古墳破壊の記録と考えられる内容が残されている。実際の古墳の石材採取に関する痕跡としては、高安千塚古墳群の大窪・山畑 29 号墳などで、江戸時代後期頃とみられる矢穴が残されている。また、1816 年（文化^{ぶんか}13 年）の旧信貴橋の石材には「石細工 服部川村 小右エ門」等の銘があり、高安千塚古墳群の中心である服部川村には古くから石工職人がおり、石工業がさかんであったようである。

江戸時代に高安千塚古墳群が広く知られていた史料としては、河内国の名所の一つとして紹介された『河内鑑名所記』（1679 年：延宝 7 年）や『河内名所図会』（1801 年：享和元年）がある。『河内名所図会』では、法蔵寺境内に洞穴状の古墳が描かれている（図 2-5 上）が、特に有名な挿絵が図 2-5 下である。この挿絵では、名所図会に多く描かれた名所の鳥瞰図ではなく、まさに古墳から副葬品を掘り出す情景が描かれている。

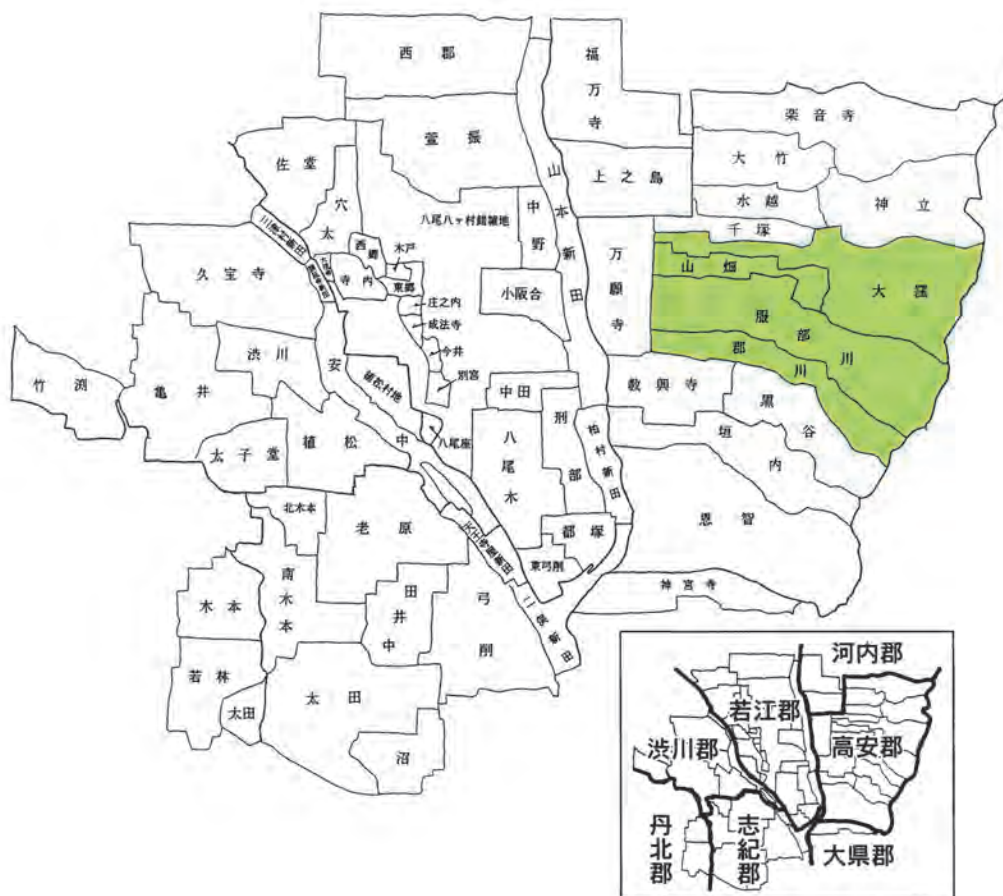
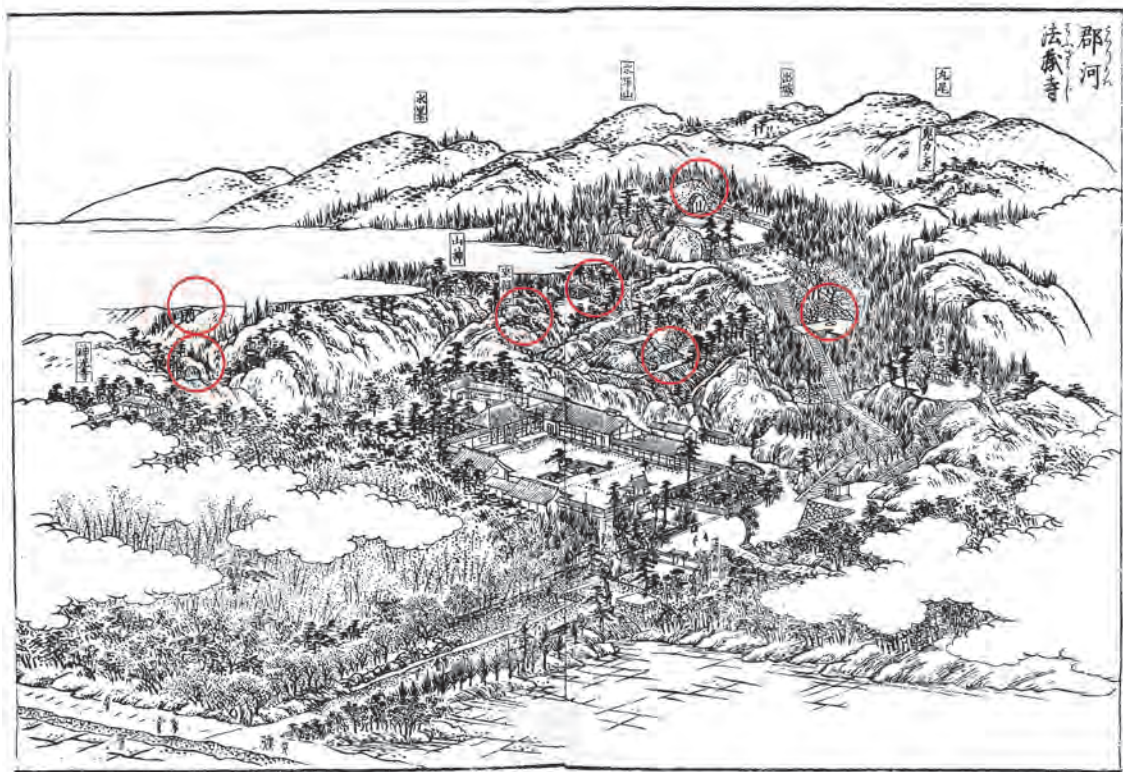


図 2-4 江戸時代の八尾市内の村々



○が法蔵寺境内に描かれた古墳



図 2-5 『河内名所図会』に描かれた高安千塚古墳群

⑨近代～現代

戦前

明治維新後の廃藩置県を経て、1889 年（明治 22 年）の市町村制施行後、高安郡の村々は北高安村や中高安村に属することになった。そして両村は合併し、1931 年（昭和 6 年）に高安村になった。

明治時代の高安千塚古墳群に、日本考古学の出発点となった大森貝塚の発見で知られる米国人博物学者の E・S・モースや、日本考古学の父といわれる英国人の冶金技師で研究者の W・ガウランドをはじめとする外国人研究者が現地調査に訪れ、その研究成果が海外に紹介された。モースは開山塚古墳をはじめとする石室の図面を残し、ガウランドは二室塚古墳などのガラス乾板写真を残し、大英博物館のガウランドコレクションの一部となっている。さらに、日本考古学の発展に寄与した坪井正五郎も調査に訪れた。

その後、明治半ばから昭和初めにかけての近代化に向けた鉄道網の整備の中で、1930 年（昭和 5 年）に大阪電気軌道により河内山本駅から山麓部の信貴山口駅までが鉄道で結ばれ、信貴山電気鉄道が信貴山口駅から山頂の高安山駅までケーブルカーで、さらに高安山駅から信貴山門駅まで鉄道でつながった。鉄道網の整備により、高安山麓の観光名所の一つであった高安の梅林とともに、「千塚」が新聞記事等で紹介されるなど、観光地として注目されるようになる。信貴山電鉄が発行した沿線案内には、鳥瞰図画家として著名な吉田初三郎により高安千塚古墳群にある古墳が描かれている。

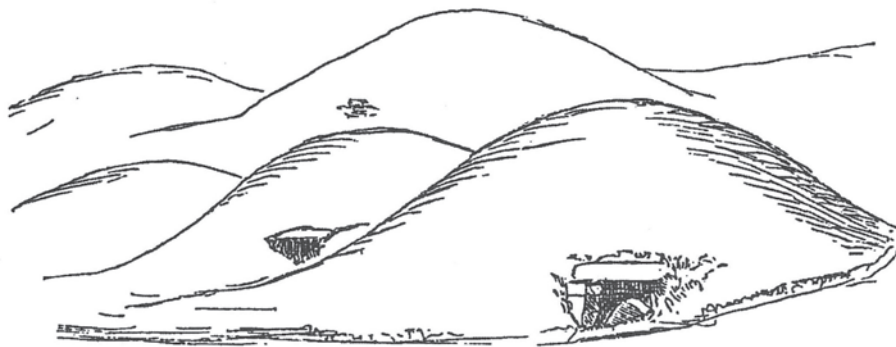


FIG. 1.—GENERAL APPEARANCE OF DOLMENS.

出典：EDWARD S. MORSE 1880 DOLMENS IN JAPAN THE POPULAR SCIENCE MONTHLY vol. XVI (佐野隆弥・田中一廣訳・校註 1991 E・S・モース「日本におけるドルメン」『花園史学』第 12 号)

図 2-6 モースが描いた高安千塚古墳群

戦後

戦後、1948 年（昭和 23 年）の八尾市発足後、1955 年（昭和 30 年）には高安村が八尾市に編入、その後 1964 年（昭和 39 年）に若林、松原市の一部が編入され、現在の

八尾市が誕生した。八尾市は、現在人口約 27 万人（平成 28 年 3 月末現在）であるが、高安千塚古墳群が属する現在の高安地区（高安小学校区・31 町会で構成）はそのうち約 1 万人の人口である。高安地区では、江戸時代の旧村々を中心として宅地が広がるようになる。

高安千塚古墳群及びその周辺は、ガスが普及する昭和 30 年代頃までは、生活に欠かせない燃料の確保のため、柴や薪などを採る里山として活用されていた。その後、古墳が連なる緩やかな傾斜地を利用して、農地化が進み、畑で植木や花卉の栽培が行われた。

地元での聞き取りによると、植木業は戦前からあったが、戦後盛んに行われ、高安千塚古墳群がある服部川地区では、「したてもん（仕立物）」とよばれた苗木を他地から購入し、この地で「つくりもん」といばれた庭木として整えたものを出荷していたとのことである。昭和 30 年代頃までは、「フキオロシ」とよばれた強い風により形が整い生育した松などを、運搬具である「ヤマグルマ」で山の上から下したとのことである。また、石工業も江戸時代から引き続いて行われていた。服部川支群付近の石材は「マイシ」といって面を持って割れるため、細工には向いておらず、北側の大窪・山畑支群付近の石材は「カナンボウ」といって、丸みを帯びた石材で堅く、細工に適していたとのことである。このように植木業や石工業が、現在の造園業に結びつき、地域の産業の基礎となったようである。

高安千塚古墳群は、畿内有数の大型群集墳として、横穴式石室を有する古墳が密集して造られた。そして、その後の長い歴史の中で、高安山麓の豊かな自然や植木畑のなかに古墳が連なる独特の歴史的な景観が形成され、現代に伝えられている。

表 2-1 高安山麓を中心にした八尾の歴史

時代	世紀等	高安山麓を中心にしたおもなできごと	日本のおもなできごと
旧石器時代	約2万年前	・八尾南遺跡などで国府型ナイフ形石器等の石器が作られる。	・ナウマンゾウやオオツノシカ等の動物を追って狩猟生活が営まれる。
縄文時代	約1万2千年前	・河内湾を望む恩智、久宝寺、田井中、池島・福万寺遺跡などで人々の生活が営まれる。	・縄文土器が使われる。
弥生時代	紀元前4世紀 2世紀	・河内湖を望む山賀、久宝寺、亀井、田井中、池島・福万寺・恩智遺跡など平野部から山麓一帯に多くの集落や水田が営まれる。	・弥生土器が使われる。 ・コメ作りがはじまり、ムラができる。 ・銅鐸のまつりが行われる。
	紀元後2世紀 3世紀	・恩智遺跡 ^{かいちやまどうたく} の垣内山銅鐸・都塚山銅鐸 ^{みやこづかやまどうたく} 、跡部遺跡 ^{あとべ} で跡部銅鐸が埋納される。 ・大竹西遺跡の鑄造鉄剣 ・中田、東郷、久宝寺遺跡などで大規模な集落が営まれ、西日本からヤマトへの拠点として発展する。 ・平野部の萱振、東郷遺跡などで方墳などが営まれる。	・倭国大乱 ・239年 邪馬台国の女王卑弥呼、魏に遣使する。 ・大和に巨大な前方後円墳が築造される。
古墳時代	4世紀	・向山古墳 ・西ノ山古墳（前方後円墳 70m） ・花岡山古墳（前方後円墳 100m）	・ヤマト政権が成立する。 ・前方後円墳が盛行する。
	5世紀	・心合寺山古墳（前方後円墳 160m）	・421年～ 倭王、宋に遣使する。 ・河内、和泉に古市・百舌鳥古墳群(大王墓群)で大型前方後円墳が築造される。 ・478年 倭王武 宋に遣使する。 ・朝鮮半島から横穴式石室葬制や須恵器等の技術が伝来する。 ・近畿地方に横穴式石室が出現する。

古墳時代	6世紀	・郡川西塚古墳（前方後円墳 50～60m） ・郡川東塚古墳（前方後円墳 50～60m） 高安千塚古墳群の造墓開始 ・愛宕塚古墳（府内最大級の横穴式石室）	・538年 百濟より仏教が公伝する。 ・横穴式石室が盛行する。 ・587年 蘇我馬子、厩戸皇子らとともに、物部守屋を滅ぼす。（丁未の変） ・593年 厩戸皇子（聖徳太子）が摂政に任じられる。 ・600年 遣隋使開始
	7世紀	高安千塚古墳群の造墓終焉 ・市内最古の寺院（渋川廃寺）が建立される。 ・高安山古墳群（3基） ・667年 高安城が築かれる。 ・心合寺や高麗寺等が建立される。 ・池島・福万寺遺跡で条里制地割水田が出現する。	・607年 法隆寺建立 ・630年 遣唐使開始 ・645年 乙巳の変 ・663年 白村江の戦いで大敗 ・672年 壬申の乱
飛鳥時代	8世紀	・765年 称徳天皇が弓削寺に礼仏する。 ・766年 道鏡 法王となる。 ・769年 由義宮を西京とする。 ・由義寺の塔が建てられる。	・701年 大宝律令 ・710年 平城京遷都 ・743年 墾田永年私財法 ・752年 東大寺大仏開眼供養 ・769年 宇佐八幡宮神託事件 ・794年 平安京遷都
奈良時代	9世紀		・894年 遣唐使中止
平安時代	10世紀		・902年 延喜の荘園整理令
	11世紀		・1016年 藤原道長 摂政となる。 ・1053年 藤原頼通 平等院鳳凰堂造営 ・1069年 延久の荘園整理令 ・1086年 院政のはじまり
	12世紀	・向山瓦窯で平等院の瓦が焼かれる。 ・池島・福万寺遺跡で藤原氏の荘園・玉櫛庄関係の水田が経営される。	・1101年頃 平等院鳳凰堂が瓦に葺き替えられる。 ・1167年 平清盛 太政大臣となる。

鎌倉時代	12世紀	・1185年 北条時政の制札が菫光寺に出される。	・1185年 源平の戦いで平氏が滅ぶ。 ・1192年 源頼朝 征夷大將軍となる。
	13世紀	・1280年 久宝寺に慈願寺建立 ・1281年 弘安の役の折、教興寺で叡尊が蒙古降伏の祈禱を行う。 ・池島・福万寺遺跡で溝に囲まれた屋敷が建てられる（13世紀～14世紀）。	・1274年 元寇(蒙古襲来)文永の役 ・1281年 元寇(蒙古襲来)弘安の役
	14世紀		・1333年 鎌倉幕府が滅びる。 ・1334年 建武新政 ・1338年 足利氏が京都に幕府開く。 ・1392年 南北朝の合一
(南北朝) 室町時代	15世紀	・神立墓地で一石五輪塔が造られ始める。 ・1470年 蓮如が久宝寺で布教する。	・1467年 応仁の乱
	16世紀	・1542年 顕証寺の本堂が完成する。 ・1549～1450年 河内守護畠山氏が真観寺の方丈作事のために高安郡の石を運ぶ。(真観寺文書)	・1549年 キリスト教伝来 ・1573年 織田信長 室町幕府滅ぼす。
安土・桃山時代		・1581年 八尾城内にキリスト教仮聖堂が造られる。 ・1582年 キリシタン墓碑が建てられる。 ・1583年 大坂城築城で「千塚之石」利用される。(稲本文書)	・1583年 豊臣秀吉 大坂城築城する。 ・1585年 豊臣秀吉 関白となる。 ・1587年 伴天連追放令が出される。 ・1600年 関ヶ原の戦い
江戸時代	17世紀	・1608年 森本七郎兵衛ら慈願寺とともに久宝寺を出る。八尾寺内町が成立する。 ・1608年 八尾寺内町で大信寺が建立される。 ・1615年 大坂夏の陣若江・八尾の戦い ・1679年 『河内鑑名所記』に高安千塚古墳群が紹介される。 ・1689年 「山根木綿」の名が知られる。(南遊紀行)	・1603年 徳川家康 江戸幕府開く。 ・1614年 大坂冬の陣 ・1615年 大坂夏の陣
	18世紀	・1704年 大和川の付け替え ・1705年 大念仏寺の礎石の石材を高安の村々から調達する。	・1716年 享保の改革 ・1787年 寛政の改革

江戸時代	19世紀	・1801年 『河内名所図会』に高安千塚古墳群が紹介される。 ・高安千塚古墳群やその周辺で石材利用が行われる。 ・1816年 信貴橋の橋石材に「服部川村石工 小右門」と刻まれる。 ・1819年 土砂留奉行に塚穴の石の除去願い出あり。(斎藤家文書) ・1846年 楽山上人ぎょうざんしょうにん 服部川村石工の幸左衛門に地蔵菩薩を造らせる。 ・1856年 神立で菊が栽培される。(辻井儀兵衛文書) ・1869年 河内県庁が大信寺におかれる。 ・1879年 米国人モースによる高安千塚古墳群の調査 ・1881～1888年 英国人ガウランドによる高安千塚古墳群の調査 ・1888年 坪井正五郎による大窪のドルメン等の調査 ・1889年 大阪鉄道 八尾駅が開業する。	・1833年 天保の飢饉 ・1841年 天保の改革 ・1853年 ペリー 浦賀に来港する。 ・1867年 大政奉還 ・1868年 明治維新
			・1889年 大日本帝国憲法発布 ・1889年 市町村制の施行 ・1894年 日清戦争
	20世紀	・1914年 大阪電気軌道の沿道名所案内で「千塚」が紹介される。	・1904年 日露戦争 ・1914年 第一次世界大戦 ・1923年 関東大震災
		・1930年 大阪電気鉄道 河内山本駅～信貴山口駅、信貴山電気鉄道 鋼索線・山上鉄道線が開通 ・1930年 信貴山名所案内(吉田初三郎画)に、高安千塚古墳群の古墳が描かれる。 ・江戸時代より引き続き、高安千塚古墳群付近で石切や石細工が行われる。 ・高安千塚古墳群付近で植木畑が行われる。 ・1948年 八尾市誕生	・1939年 第二次世界大戦 ・1941年 太平洋戦争 ・1945年 広島・長崎原子爆弾投下、終戦 ・1946年 日本国憲法公布
明治時代			
大正時代			
昭和時代			

(2) 高安千塚古墳群と密接に関係する古墳

高安千塚古墳群以外の高安山麓の古墳時代後期の古墳は散発的であるが、尾根上に2～3基、あるいは数基程度のまとまりである。これらは緩傾斜面に立地するものや標高200～400mの急傾斜面に立地するものがある。

この中には、郡川地区の郡川西塚古墳や郡川東塚古墳、神立地区の愛宕塚古墳、明治時代の坪井正五郎氏の調査で著名な大窪・山畑地区のドルメン古墳（大窪・山畑27号墳）、服部川支群の上方に位置するW・ガウランドが調査した大型石室の二階塚古墳^{にかいつか}などの貴重な古墳がある。

これらの古墳は、石室形態や分布などが高安千塚古墳群とは異なる特徴を有しているものの、高安千塚古墳群と密接な関係にあったと考えられ、高安山麓さらには生駒山系西麓の後期古墳を考える上でも重要である。

①郡川西塚古墳・郡川東塚古墳

高安千塚古墳群から約1km西方の郡川地区に、郡川西塚古墳（以下「西塚」という）と郡川東塚古墳（以下「東塚」という）が東高野街道（旧国道170号）を挟んで東西に造られている。両古墳とも高安千塚古墳群の造墓時期に近い6世紀前半に造られた全長約60mの前方後円墳である。

西塚は、後円部を南に向けた前方後円墳で、現在墳丘の周囲が畑や田として使用されている。1902年（明治35年）の開墾時に横穴式石室から多くの副葬品が出土しており、当時の状況は、梅原末治や清原得巖による聞き取り調査の記録から知ることができる。南に開口する横穴式石室から、^{しんじん か} 神人歌舞画像鏡^{ぶ が ぞう きょう}や垂飾付耳飾^{すいしよくつきみみかざり}、管玉、勾玉をはじめとする副葬品が出土している。これらの資料は現在東京国立博物館に所蔵されている。平成27年度の範囲確認調査で、墳丘及び葺石の一部や周濠の存在を確認している。

東塚は、1897年（明治30年）の開墾や近年の宅地開発により墳丘はその姿をとどめていない。明治期の開墾時に^{がもんたいしんじゅうきょう} 画文帯神獸鏡（旧重要美術品）や玉類、鉄製品をはじめとする副葬品の一部が確認されている。また、平成13年度の発掘調査により、南面する大型横穴式石室の痕跡や後円部からくびれ部にかけての埴輪列を確認している。

これまで地域首長墓がなかった山麓南部に造られた前方後円墳である東塚と西塚の被葬者は、初期横穴式石室を採用し、鏡や垂飾付耳飾など豊富な副葬品を有していることから、朝鮮半島からの文化や技術をいち早く導入できた人物であり、また、その前後に高安千塚古墳群の造墓が開始され、両者は深い関係があったと考えられる。

特に墳丘及び周辺が良好に残る西塚については、発掘調査等により古墳の内容を明らかにし、高安千塚古墳群との関係を含めた考古学的な価値を定め、高安千塚古墳群と一体的な保存を検討する必要がある。

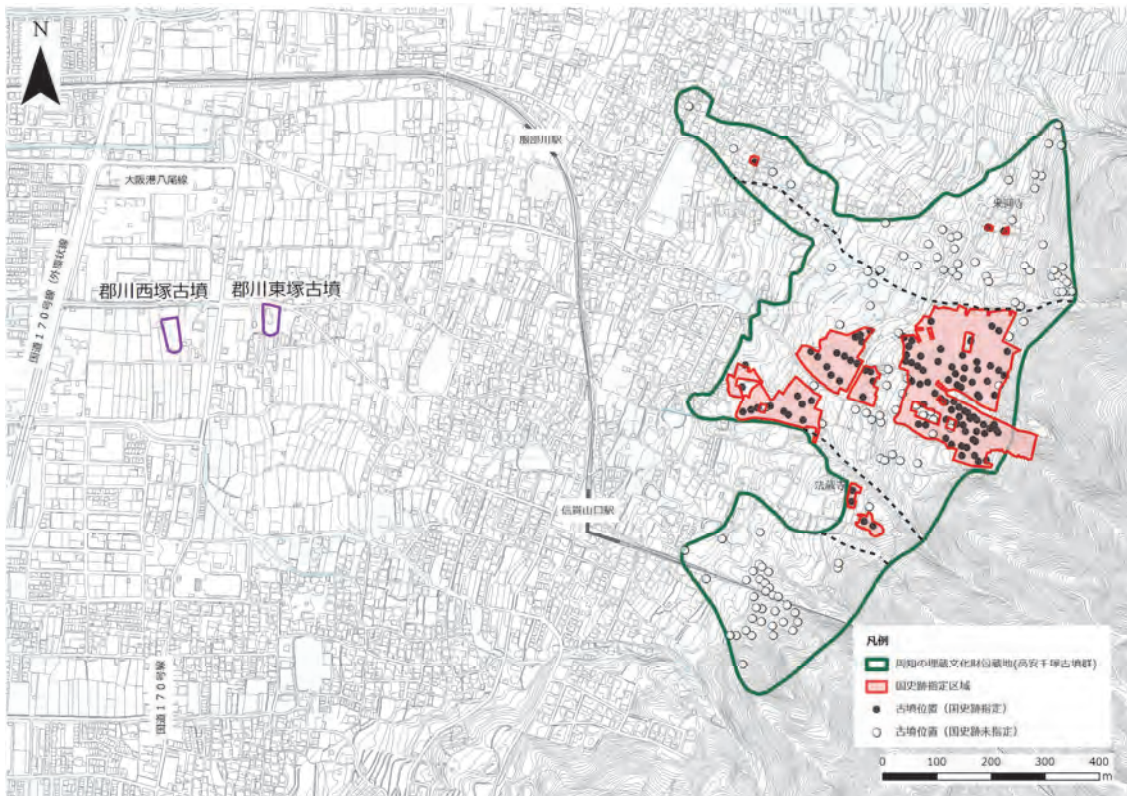


図 2-7 郡川西塚古墳・郡川東塚古墳の位置



出典：2008 年撮影カラー空中写真（国土地理院）
<http://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>

図 2-8 郡川西塚・郡川東塚古墳の航空写真



図 2-9 現在の郡川西塚古墳（南西から）



図 2-10 郡川西塚古墳墳丘測量図



図 2-11 郡川東塚古墳出土の鉄製品

②愛宕塚古墳（府指定史跡）

愛宕塚古墳は、周囲に後期の古墳はなく、6世紀後半頃に独立して造られたと考えられる古墳である。墳丘は円墳で、現状は直径約22.5m、高さ約9mを測る。南に開口した両袖式の横穴式石室は、大型石材を2段積みで造られ、天井石3石が完存している。石室は、全長15.7m、玄室長7m、幅3.1m、高さ4.2m、羨道長8.7m、羨道幅2.1m、高さ2.1m、玄室面積21.7㎡を測る。石室内から凝灰岩製の家形石棺^{いえがたせつがん}の破片が出土している。

古くは1888年（明治21年）に山崎直方^{やまさきなおまさ}により石室規模等が実測されており、以後1914年（大正3年）に梅原末治^{うめはらすえじ}が紹介するなど考古学史上、著名な古墳で、1967年（昭和42年）には大阪府教育委員会により石室内の調査が行われた。その後、1992年（平成4年）3月31日に墳丘及び石室部分を中心に405㎡が府指定史跡となった。

副葬品は、武器類では銀象嵌金具付のねじり環頭大刀や三輪玉^{みつりんたま}、鉄鏃^{てつぞく}、鉄鉞^{てつへこ}、石突^{いしづき}、馬具類では鉄地金銅張の子持剣菱形杏葉^{こもちけんびしがたぎょうよう}や鏡板、鞍金具、木芯鉄張鐙^{もくしんてつばりあぶみ}、金銅製の飾金具類、装飾品ではガラス玉等が出土している。また、多数の須恵器は、時期幅があることから、改葬や追葬等があったことを物語っている。これら出土品は1995年（平成7年）12月13日に府指定有形文化財となっている。

石室の玄室面積では高安千塚古墳群において匹敵する石室はなく、大阪府内の大型横穴式石室である鉢塚古墳^{はちづか}（池田市：面積20.7㎡）と比較しても府内最大級である。近畿地方でみると、見瀬丸山古墳^{みせまるやま}（奈良県橿原市：面積34㎡）、石舞台古墳^{いしぶたい}（奈良県明日香村：面積26.3㎡）、蛇塚古墳^{へびづか}（京都府京都市：面積25.8㎡）に次ぐ面積である。大型横穴式石室が多く分布する奈良県において近い古墳は、塚穴山古墳^{つかあなやま}（天理市：21㎡）やウワナリ古墳（天理市：19.9㎡）、二塚古墳^{ふたづか}（葛城市：20㎡）、條ウル神古墳^{じょうがみ}（御所市：約19㎡以上）、牧野古墳^{まぎの}（北葛城郡広陵町：20.1㎡）、赤坂天主山古墳^{あかさかてんのうざん}（桜井市：19㎡）などがある。これらは前方後円墳ないし大型の円墳（直径40m以上）である。

現状の墳丘は、直径約22.5mを測る円墳であるが、周辺の地形から直径約30m以上に復元でき、さらに周溝もしくは周濠を持つとみられる。

愛宕塚古墳の被葬者は、副葬品の構成や大和の有力氏族の古墳の石室にみられる玄室面積と同等規模であること、また墳丘規模等の想定から、大和の有力氏族と同等クラスの人物と考えられ、中河内の有力氏族である物部氏との関連も考えることができる。また、南方約1.5kmに位置する高安千塚古墳群と造墓時期と重なっており、両者の関係も検討が必要である。

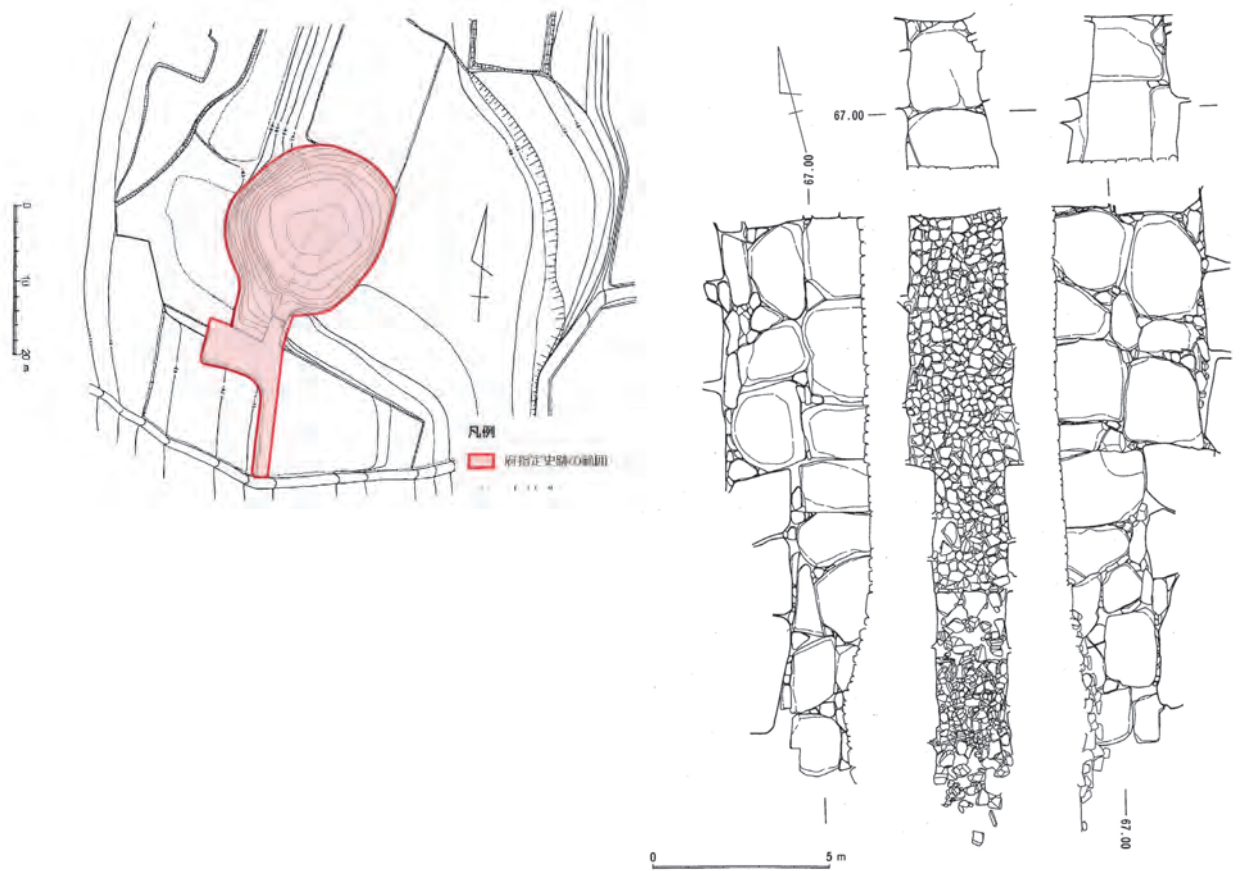


図 2-12 愛宕塚古墳の墳丘（左）と横穴式石室（右）



図 2-13 愛宕塚古墳の石室